

## 九州に於ける六所宝塔の建立をめぐって

森 弘子

はじめに

大宰府の東北鬼門を扼して聳える標高八二九・六メートルの宝満山は古くは竈門山とも御笠山とも称された。その山麓、竈門神社下宮から東北に約七〇〇メートル、本谷池と南谷池の上の尾根の先端部の平地、標高二八〇メートルの地点にある本谷礎石群で、平成二十年一月から四月まで、太宰府市教育委員会によって文化庁の補助事業による発掘調査が行われた。

本遺跡は、昭和五十六年（一九八一）に小西信二によって、雑木林の中に方三間の建物跡の九個の礎石、基壇の一部、九世紀から一〇世紀のものと考えられる瓦などが発見され、最澄が発願した日本国六所宝塔院のうち「安西筑前宝塔院」の跡ではないかとされてきた遺跡である。発見時、礎石群の中心に「妙見さま」を祀るといふ小石原焼の祠があったため「妙見祠礎石群」と命名された。妙見さまの祠は基壇の石と思われる石を転用して台座を造り、その上に祀られていたが、現在は、ここから宝満山頂への登山道沿いの地点に移されている。祠には二〇センチほどの高さの「ご神体」の石が納められており、その石面に、蓮台の上に「寶塔」と彫られた文字がかすかに見えていた。

小西信二の調査は『宝満山の地宝』<sup>(2)</sup>に報告され、『太宰府市史』<sup>(1)</sup>では建築・美術工芸資料編に澤村仁が「第一編第七章 古代宝満山の建

築」に、考古資料編に狭川真一が「第二編第六章第六節竈門山寺」に「妙見祠礎石群」として、表面観察による調査報告を記載している。これらの論では礎石はやや小型ではあるが、復元される建物は多宝塔の可能性が高く、出土瓦等の遺物も、『石清水文書』の承平七年（九三七）十月四日付の「大宰府牒」の中に見られる證覚が建立したという六所宝塔の「竈門山分塔」の年代とも合うとされている。

本稿では、最澄発願の日本国六所宝塔とはいかなるものであったのか、またこの遺跡がその跡ではないかとされる根拠となった『石清水文書』とはいかなる文書であるのかを述べ、さらに本文書に記された宇佐宮神宮寺弥勒寺に建立の予定であった安南塔が宮崎神宮寺に建立されたということについて、その背景等、九州に建立された六所宝塔をめぐる問題について考察するものである。

### 一 最澄発願の日本国六所宝塔

六所宝塔造立の理念 日本国六所宝塔の建立は、大乘戒壇設立とともに最澄の二大本願といわれる。奈良時代における国分寺の制が華嚴の教学と金光明經の功德による国家統治の理想を掲げ実施されたように、天台の教学による日本国の護持、法華經の功德による治国の理想を掲げ、日本の中央と辺境の六ヶ所に設置されたものである。その根

拠は『天台霞標』に収められた弘仁九年（八一八）四月二十一日に最澄が記したという「六所造宝塔願文 護国縁起」に求められている。

六所造「宝塔」願文 護国縁起

安<sub>レ</sub>東 上野宝塔院。在<sub>二</sub>緑野郡<sub>一</sub>

安<sub>レ</sub>南 豊前宝塔院。在<sub>二</sub>宇佐郡<sub>一</sub>

安<sub>レ</sub>西 筑前宝塔院。

安<sub>レ</sub>北 下野宝塔院。在<sub>二</sub>都賀郡<sub>一</sub>

安<sub>レ</sub>中 山城宝塔院。在<sub>二</sub>比叡山西塔院<sub>一</sub>

安<sub>レ</sub>総 近江宝塔院。在<sub>二</sub>比叡山東塔院<sub>一</sub>

住<sub>二</sub>持仏法<sub>一</sub> 鎮<sub>二</sub>護国家<sub>一</sub> 仰願十方 一切諸仏 般若菩薩

金剛天等 八部護法 善神夜叉 大小比叡 王子眷属 天神地祇

八大名神 七千夜叉 同<sub>レ</sub>心覆<sub>二</sub>護<sub>一</sub> 大日本国 陰陽応<sub>レ</sub>節

風雨順<sub>レ</sub>時 五穀成熟 萬姓安樂 紹<sub>二</sub>隆仏法<sub>一</sub> 利<sub>二</sub>益有情<sub>一</sub>

尽<sub>二</sub>未來際<sub>一</sub> 恒作<sub>二</sub>仏事<sub>一</sub>

弘仁九年四月二十一日 一乗澄記

諸仏・諸神に祈り、仏法の恒久と鎮護国家を願い、さらに大日本国の陰陽が節に応じ、風雨が時に順い、五穀豊穡にしてすべての人々が安穩で仏法が紹隆し、生きとし生ける者を利益し、未来永劫に仏教が盛んであるようにと願っている。表題にも「護国縁起」とあるように、六所宝塔建立の眼目は鎮護国家・福利群生であり、それを法華経の功德で達成しようと言うのである。

この塔の形態とそこで行われるべき修法については、『叡山大師伝』に次のように記されている。

大師本願。写六千部法華経。造六基之多宝塔。塔別安置一千部経。毎日長講。福利国家也。

すなわちこの塔は多宝塔で、それぞれの塔の上層には日本国で書写した法華経一千部八千巻ずつを納め、下層では毎日法華三昧法を修し、福利国家を祈るといふものであった。

宝塔の建設地は比叡山を中心に据え、東西南北の辺境に建設が予定された。中心に比叡山を据えていることは、天台的な世界観にもとづいて比叡山を須弥山にみたてたもので、「比叡山をして護国仏教・鎮護国家の中心道場とする」という志向をも示しているとも考えられている。また東西南北の辺境に設置されたのは、これらを以て、法華経の功德は全国土を覆うということが観念されるからであろう。

六都護府の思想 企画された宝塔が六基であること、設置場所とそれぞれの塔に「安東」「安南」「安西」「安北」等の名称が付けられていることなどから、六所宝塔建立の思想は、中国唐代に周辺諸民族の支配のため辺境に置かれた官庁「都護府」の思想から暗示をうけ、最澄が構想を立てたものともいわれている。

竈門山に建てられた安西筑前宝塔について言えば、下野大慈院に建てられた安北宝塔と建設時における共通点や、後世における両地の関係が興味深い。すなわち下野宝塔院が置かれた下都賀郡は、東戒壇のあった下野薬師寺（現在下野市、以前は下都賀郡のうちであった）にほど近く、西戒壇があった観世音寺と竈門山との関係に相通じるものがある。「筑前宝塔院（西方安鎮宝塔）」が、西日本の戒壇院が早くから設置されていた観世音寺の付近に営まれ、東日本の戒壇院が置かれていた下野薬師寺に近い下都賀郡小野の大慈寺に、北方安鎮の下野宝塔院を設置したことは、既成の小乗戒壇に対して大乘仏教の法幢をかかげて堂々と乗り込んでいった最澄の壮んな意気ごみを明らかにすることができるといふ見方もあるが、中央における大乘戒壇の設立運

動はともあれ、一概に旧仏教（小乗仏教）に対する新仏教（大乘仏教）というような対立的構図では語ることはできないと考えられる。

## 二 六所宝塔院の設立場所

ここで九州以外の地に建てられた宝塔院の建立について見ておきたい。『叡山大師伝』によると、弘仁五年（八一四）最澄は無事渡海を遂げることができたことを、渡航前に祈願した神々に報謝するため筑紫国に下り、高さ五尺の檀像千手観音菩薩一軀をつくり、大般若経二部一千二百卷、妙法蓮華経一千部八千卷を書写した。さらに宇佐の八幡大神、香春山の神宮寺に詣で神恩報謝の法華経を講じた。九州への旅から帰ると、同じく弘仁年間最澄は東国に向かい、上野・下野に宝塔を建立した。法華経二千部一万六千卷の書写には、上野国浄土院の教興・道応・真静、下野国大慈院の広智・基徳・鸞鏡・徳念等が加わった。彼らは「鑑真和上の持戒第一弟子」とされ、下野戒壇設立の際東国へ下った道忠（七三五～八〇〇年頃）の弟子たちであり、この道忠門下からは、直弟子の円澄（二代）、大慈院の広智の弟子円仁（三代）・安慧（四代）、さらには安慧の弟子猷憲（七代）と次々に天台座主を輩出している。天台宗の基礎は道忠と最澄の深い絆によって確立されたと言っても過言ではないであろう。

また一千部写経のうち二百部は信濃国大山寺の正智禪師が諏訪大神の加護を得て七頭の馬で上野国に送ったという話も伝えられている。六所宝塔の建立はまさに広汎な神仏の加護のもとにおし進められたのである。

安東宝塔院 安東の上野宝塔院は緑野郡浄土院（現群馬県藤岡市浄法

寺）に弘仁八年（八一七）に建てられたという。この寺は通称緑野寺と呼ばれ、道忠が建立し、鑑真の請来した經典の写しを置き、一切経の寺として知られていた。最澄は三十一歳のころ一切経書写の願をおこし、道忠に助書を依頼している。その御礼もあつてか、ここに宝塔を築き法華経一千部八千卷を安置し、塔の下で毎日法華経や金光明経、仁王経を講じたという。その時参集した人は九万人とも伝えられている。

しかしこの寺は天文二十一年（一五五二）兵乱のため焼亡し、江戸時代に再興したもの、もはや昔日の姿は取り戻せず、現在では寛文十二年（一六七二）改造、文政十二年（一八二九）補修の相輪櫓が、境内を分断して通る国道沿いに道忠禪師供養塔と並んで建っている。相輪櫓は本来五重塔等の上にある宝珠・竜車・九輪・請花・伏鉢を柱の上に建てたいわば五重塔などを簡略化した形のものといわれる。現在、浄法寺の他に、下野宝塔院のあった大慈寺、比叡山西塔にも相輪櫓がある。何らかの事情で多宝塔が失われた後、多宝塔再建はかなわず、相輪櫓に替えたものであろうか。

安北宝塔院 安北の宝塔は下野国大慈院（現栃木県下都賀郡岩舟町小野寺の大慈寺）に安東塔と同じ年に建てられた。この寺は天平九年（七三七）行基の開山と伝え、円仁が九歳から十五歳までの六年間修行した寺である。円仁は大同三年（八〇八）、当寺の師広智に連れられ比叡山に登り最澄に師事することになったと伝える。件の宝塔は大火で焼失し、現在は享保十年（一七二五）再建された相輪櫓が奥の院がある黒岩山の登口に建っている。奥の院は小高い岩山で、慈覚大師円仁の座禅修行の場と伝え、行基菩薩・道忠菩薩・広智菩薩の開山三菩薩と慈覚大師の名が刻された享保二十一年銘の開山塔が建っている。

る。<sup>(16)</sup> なお境内には『入唐求法巡礼行記』の研究者として知られる元駐日大使ライシャワー博士の慈覚大師を世界史的偉人と称える碑が建っている。

上野の緑野寺（現浄法寺）は伝教大師が再興したとも言われ、境内には伝教大師御廟堂などもあり、下野の大慈院（現大慈寺）は、慈覚大師ゆかりの寺として、ともにこの地方の中心的天台寺院として今日に至っている。

比叡山東塔・西塔 六所宝塔の内比叡山には、二基の宝塔が設置された。すなわち比叡山の山城国域に日本の中央を安んずる安中宝塔院を、近江国域に日本国全体を安んずる安国（安総）宝塔院が置かれた。比叡山には、三塔・十六谷の教团的組織があるが、最も基本となつている三塔は、この六所宝塔院のうち安中宝塔を基にした西塔と安総宝塔を基に発展した東塔、三代座主円仁が建てた根本如宝塔（写経塔）を中心とする北塔（後の横川）である。それぞれの塔を中心に伽藍や山坊が営まれ、さらに地形などによつて十六谷に分かれた。

東塔は、最澄の草庵に発した一乗止観院（根本中堂）、最澄の悲願であり比叡山の宗教史上きわめて重要な建物である戒壇院（大乘戒壇）、大講堂など重要な堂塔があり、天台宗の発祥の地であり、比叡山の中心的エリアである。安国（安総）宝塔院は貞観四年（八六二）に建立されたが、元龜二年（一五七二）の織田信長の焼き討ちによつて焼失した。昭和五十五年（一九八〇）、伝教大師ご出家得度一二〇〇年を記念し、法華総持院東塔として方五間の堂々たる多宝塔が根本中堂の上に再建された。<sup>(18)</sup> 塔の上層には、最澄が将来したという仏舍利を中心に、有縁の人々によつて浄写された法華経一千部、五〇万巻の般若心経、千万遍の念仏名号が納められ、下層の須彌壇に

は胎藏界大日如来を中心に五仏、正面の四本柱には弥勒・観世音・文殊・普賢の四菩薩、両面の壁画には法華経の四要品、裏面の壁画には金剛界五仏が描かれている。

西塔の場所には延長元年（九二二）に安中山城宝塔院が建立された。現在は釈迦堂、常行堂と法華堂を渡り廊下でつないだ「にない堂」などがあり、閑かな修行の場といった趣である。その一隅に高さ一〇メートルの青銅製の相輪様が建っており、塔内に法華経・大日経等が納められているという。<sup>(19)</sup>

六所宝塔建立地の意味 以上のように、安北・安東の宝塔院の建立が、下野薬師寺に戒壇が設立されたとき、授戒の資格のある僧として同寺に派遣された鑑真の弟子道忠の門下、つまり旧仏教系の人々の助力によるところ大であり、また八幡や諏訪などの古来の神祇の冥加、言い換えるならばその司祭者集団の助力によつて成就することができたのである。

建立地としてこれらの地が選ばれたのは、第一項の末尾に述べられたような「旧仏教に対抗して」ということではなく、下野も大宰府も、日本の「周縁」における「中心」だからということができれば。こうした国土感は奈良時代以来のもので、中央の戒壇が奈良の東大寺に置かれ、東の戒壇が下野薬師寺、西の戒壇が大宰府観世音寺に置かれたと同様の考え方で、六所宝塔の設置場所も企画されたものと考えられる。山岳というならば、東の辺境の山Ⅱ下野日光山、西の辺境の山Ⅱ大宰府龍門山で、ともに国境祭祀と考えられる祭祀が行われたのも、同様の意味をもつものである。

なお安東の上野宝塔については、道忠が鑑真が将来した經典の写しを緑野寺にもたらし、この寺が一切経を持つ寺として、また、写経活

動を盛んに行っている寺として中央にも名が知られており、延暦十六年(七七七)頃、一切経書写の願を發した最澄が、道忠に助書を依頼した経緯があることなどが、建立地として選ばれた理由と考えられる。

安南の宇佐八幡弥勒寺の宝塔については、宇佐という地が周防灘を通して半島・大陸と、瀬戸内海を通して都につながり、また南は隼人の地に対峙するという地点であり、古くから独特の文化を形成し、八幡宮発祥の社宇佐八幡宮は勅使(宇佐使)を迎えるなど九州で最も格式が高い神社であり、かつ九州の社寺最大の領地を有するなど、強大な勢力を持っていた。官社としての八幡宮が小倉山おぐらに成立した神龜二年(七二五)、同時に宮の東の足林にはじめて寺を造り弥勒足禪院と号したと伝える。<sup>(20)</sup> また東大寺大仏建立の際の八幡神の入京などの出来事に見られるように、八幡神は日本の神祇の中では最も早く最も親密に仏教に接近した神であり、最澄の来訪を喜んで迎え、自ら齋殿を開いて手に紫袈裟と紫衣を捧げ持ち最澄に奉るといふ靈異を見せた。『叡山大師伝』には、この時禰宜・祝等の司祭者たちは歎異して、「元来不見不聞、かくの如き奇しき事哉」と口々に言ったと記されている。この信じがたい出来事は、宇佐八幡の司祭者たちをして、最澄の協力者たらしめるのに十分であったと考えられる。

### 三 安西筑前宝塔院建立前夜

最澄と龍門山 江戸期の『龍門山宝満宮伝記』『筑前国統風土記』などでは「六所造宝塔 護国縁起」を「伝教大師の遺記」として引用し安西筑前宝塔院に「有智山寺宝塔院是也」という注記を入れている。しかし前記原文では、六所宝塔の建立場所について、他の五ヶ所につ

いては具体的な郡名までの記述がなされているにもかかわらず、安西筑前宝塔院については「筑前」とのみ記するだけである。また『叡山大師伝』にも

且修營三千部三基塔已畢。猶未修造中国二千部二基塔。西国一千部一基塔。但中国之分。叡岳東西兩塔是也。

とあり、最澄の生前には三基の宝塔のみが建立され、中国二千部二基塔と西国一千部一基塔は未だ修造されていないと記されている。しかも中国分は比叡山の東西兩塔であると建立場所が記されているのに対し西国分については、ここでも建立場所が明記されていないのである。つまり安西の宝塔は最澄が亡くなる時までには建設場所さえ決まっていなかったものと考えられる。その建立場所を龍門山に定めることに力を注いだのが三代座主慈覚大師円仁ではなかったか考える。

最澄は延暦二十二年(八〇三)閏十月二十三日、入唐請益天台法華宗還学生として唐へ渡る船待ちの際、大宰府龍門山寺において遣唐四船の渡海の平安を祈って薬師仏四軀を彫り、法華経・涅槃経・華嚴経・金光明経等を講説した。<sup>(21)</sup> このことは、龍門山が中央の史書に登場する初見のできごとであり、天台宗にとっては龍門山が「祖師の聖跡」として大きな意味を持つ重要なできごとであった。

船待ちの間九州に滞在した一年二ヶ月余、最澄は安全祈願や渡海の便を得るために宇佐、香春に行ったことが知られるが、大半は大宰府で過ごしたと考えられる。しかし入唐求法の平安を祈って薬師仏を彫り法華経などの経を講説した事以外には、大宰府での事について寡黙であり、『叡山大師伝』等の史料には宇佐や香春に比して簡単な記述しかなされていない。弘仁五年(八一四)の報謝のための再来にも大宰府の地名・寺名等は記されていない。その記述が少ないことや、実

際に安西の塔の設置場所が生前には決まらなかったところを見ると、宇佐や香春で構築したような在地の司祭者・村人等との良好な関係が<sup>22)</sup>大宰府ではできなかったのではないかと考えられる。

一千部の法華経を写経し、多宝塔を建設するという大事業は、人的、経済的基盤なしには成し得ないのである。安北・安東の宝塔建立には、下野戒壇設立の際東国へ下った道忠の弟子たちの助力によるところが大きかったことは既に述べたところである。その道忠門葉の中に円仁もいた。

円仁の願い 円仁は承和十四年(八四七)唐から帰国し、九月十九日に大宰府鴻臚館に入り、翌年の三月二十六日に入京するまで半年程も大宰府に留まっている。その間に、十月十九日、太政官符が大宰府に来て、「円仁等五人は速やかに入京すべし」と命じられるが、円仁は「入京するを獲ざるの状」を大宰府衙に提出して大宰府に留まっている。十一月二十五日には大宰少弐小野恒柯が上洛することになったので、大納言藤原良房・右中弁伴善男・参議小野篁の三人への書状を託している。どのようなことが書かれていたかは知る由もないが、入京後の円仁は良房の強力な支援を得て、入唐求法の成果をふまえ天台宗の充実と発展に邁進することができた。

『入唐求法巡礼行記』の記事は事実だけを述べた淡々とした文章であるが、それ故にこそ行間に円仁の決意を垣間見ることができるのである。官の入京命令にもかかわらず、「入京することはできない」と主張した円仁の真意は那辺にあったのであろうか。

円仁は大宰府に滞在した半年の間に、師最澄の生前に成らなかつた安西宝塔の実現のために何らかの行動をおこしたのではないだろうか。神々への報謝の転経は円仁が帰国してから二ヶ月以上も経った

十一月二十八日から十二月三日までの間、竈門山大山寺において行われている。その経緯は『入唐求法巡礼行記』に、次のように記されている。<sup>23)</sup>

廿八日、於大山寺、始入唐時所折金剛般若五仟卷、皆先馳使、奉送綵帛、同日、早朝一時發遣綵帛使訖便転経、同日、為竈門大神転一千卷、廿九日、午前為住吉大神転五百卷、午後為香椎名神転五百卷、十二月一日、午前為筑前名神転五百卷、午後為松浦少弐靈転五百卷、二日、為香春名神轉一千卷、三日、為八幡菩薩転一千卷、観音寺講師毎事相助、転経僧布施白綿式佰屯

円仁は入唐に先立ち入唐平安の祈願のため金剛般若経五千卷の転経をした。この度は、無事還ることができた御礼として入唐を守護した神々のため、それと同じだけの転経をした。竈門大神、香春名神、八幡大菩薩のためにはそれぞれ一千卷ずつと、他の神の倍の卷数の転経がなされているのは、円仁もまた最澄のあとを慕い、この三神に殊に祈願を込めたためであろう。その他、住吉大神、香椎名神等、對外関係などに関して公の祭祀が行われてきた神<sup>24)</sup>に対して五百卷ずつの転経が行われている。筑前名神はどの神のことだろうか。筑前には宗像、志賀海、筑紫など古来の大社があるが、あるいは竈門、住吉、香椎を除いた筑前の神々をひとまとめにしたものであろうか。

円仁と弟子たちだけで行うのであれば、もっと早く行えたはずである。この転経には九州の僧侶を束ねる観世音寺講師が衆僧を率いて助力し、彼らには多くの白綿が布施されている。この事は竈門山寺<sup>25)</sup>が、観世音寺等官寺僧の山林修行の際のベースキャンプ的な性格を持つ寺であったと考えられることと関係があるのかもしれない。しかし、これだけ大がかりな転経は、あるいは最澄が成し得なかつた、天台と府

の大寺観世音寺ひいては九州の旧来の仏教界との関係を取り結ぶための円仁の企てではなかったかとも考えられるのである。円仁の脳裏には若き日ふるさとの下野、さらに上野で、その地方の旧来の寺院、僧侶が最澄に協力して成し得た安北・安東の宝塔院建立のことがあったにちがいない。九州大宰府において安西の宝塔を建立するには観世音寺の協力は不可欠と感じていたに違いない。それ故、転経実現までに二ヶ月以上もの準備期間を要し、さらに転経の後も三ヶ月以上も大宰府に滞在し続け、この地方の人々との関係構築に心を砕いていたのではないだろうか。

ちなみに観世音寺は保安元年(一一二〇)東大寺の末寺になるが、その一方で大治三年(一一二八)までには観世音寺に比叡山の地主神「日吉社」が祀られていたことが知られ、<sup>(27)</sup> 中世期には観世音寺の年中行事に天台寺院の有智山寺・原山無量寺の僧が出仕しているなど、<sup>(28)</sup> 比叡山との関係を深めていたことも興味深い。今日観世音寺は天台宗に属している。

最澄の思考の中に、西を安んずる宝塔は大宰府に建立すべきという想いがあったとしても不思議ではないであろう。しかし最澄の段階では地元の協力が十分に得られず、その決定をみることはできなかった。弟子円仁は師最澄の遺志を継ぎ、最澄ゆかりの大宰府竈門山に宝塔を建立するという体勢を整えたのではないだろうか。宝満山は西の都の東北に聳え、立地も山容も平安京の比叡山と似通っている。この山に宝塔を建立し、鎮護国家の中心道場とし、さらに西国に天台宗が弘通する基礎づくりのための滞在延期と考えるのである。承和十五年(八四八)三月末入京、比叡山に帰った円仁は、<sup>(29)</sup> まず最澄の遺した跡を礼拝したという。円仁の、師最澄に寄せる想いの深さを知るのである。

弘仁五年(八一四)最澄が筑紫において調べた大般若経二部一千二百卷・妙法蓮華経一千部八千卷がどこに安置されたかも気になるところである。塩入亮忠の『伝教大師』<sup>(30)</sup> では、筑紫のできごとがすべて宇佐でなされたと解釈している。しかし筑紫は九州全体をさす場合もあるが、より狭い筑前・筑後をさす場合の方が多い。ここでは「筑紫国」とのみ見え、具体的には筑紫のどこだったかは記されていないが、五代座主円珍が著した『伝教大師行業記』<sup>(31)</sup> では「五年春。為果宿願。向大宰府」とある。筑紫国、つまり大宰府に向かった最澄は大宰府の官人に礼を述べ、再び竈門山寺に籠もったと考えられる。最澄が入唐に際して祈願をしたのは、竈門山・宇佐・香春岳の神であり、当然報恩のためにもこの三カ所を訪れなければならない。大般若経二部一千二百卷・妙法蓮華経一千部八千卷が竈門山寺に安置されていたとすれば、この一千部八千卷の法華経は、いずれ竈門山の周辺に建立されるべき宝塔に安置するため用意されたと考えてもよいのではないだろうか。

しかし宝塔の実現には円仁の来山からさらに八〇年以上の歳月を要した。最澄の遺記に基づく宝塔は、承平三年(九三三)沙彌證覚によって竈門山に造立されたのである。

この間にも、竈門山には円仁の門流が住していたことが菅原道真の詩によって窺われる。<sup>(32)</sup> 道真は延喜元年(九〇一)から同三年(九〇三)二月二十五日までの約二年間、左遷され大宰府の「南館」にあったが、この間道真と親しく交わった山僧がいたことが知られる。道真は二二歳の貞観八年(八六六)、『顕揚大戒論』の序文を父に代わって起草している。『顕揚大戒論』は円仁が師最澄の『顕戒論』の主旨を祖述した草稿を、弟子の安慧が整理し、序文を道真の父は善に委嘱したもの

であった。<sup>(38)</sup> また円仁の伝記である『慈覚大師伝』も菅原道真の撰であると考えられており、道真が、比叡山ことに円仁の門流との関係が深かったことが知られる。おそらく宝満山において、円仁の門流によって着々と九州における天台宗の拠点作りが行われていたと考えられるのである。

#### 四 宮崎宮・竈門山分塔の建立

宝塔建立命令の大宰府牒 『石清水文書(田中家文書)』(重文・石清水八幡宮所蔵) 桐六一十二「宮崎宮塔院所領官符」一巻の内に収められた承平七年(九三七)十月四日付「大宰府牒」は、千部寺僧兼祐の申状によって、六所宝塔のうち本来宇佐弥勒寺に建立すべき宝塔を宮崎神宮寺に建立しよう大宰府が命じたものであり、「大宰之印」二九を踏した正本である。内容から六所宝塔の意味、竈門山分塔が建てられた経緯をも知られる貴重な史料である。

府牒 宮崎宮

応令造立神宮寺多宝塔耆基事

牒、得千部寺僧兼祐申状僞、

①謹案、天台伝教大師去弘仁八年遺記云、為六道衆生直至仏道発願、於日本国書写六千部法花経、建立六箇基宝塔、一一塔上層安置千部経王、下壇令修法花三昧、其安置建立之処、叡山東西塔、上野・下野国、筑前竈門山、豊前宇佐宮弥勒寺者、

②而大師在世及滅後、僅所成五処塔也、就中竈門山分塔、沙彌證覚在俗之日、以去承平三年造立已成、上安千部経、下修三昧法、宛如大師本願、

③未成一処塔者、謂宇佐弥勒寺分也、伝聞、弥勒寺未究千部、書写二百部之間、去寛平年中悉焼亡乎、

④爰末葉弟子兼祐、忝歎大師遺誓之未遂、寸心発企念、弥勒寺分経火滅之替、於宮崎神宮寺、新書備千部、造一基宝塔、於上層安置千部、下間令修三昧、以可果件願、然則始自承平五年、且唱於知識、令写経王、且運材木、拽置於彼宮辺已了、

⑤彼宮此宮雖其地異、権現菩薩垂迹猶同、仍以彼弥勒寺分塔、欲造立此神宮寺也、

⑥望請府裁、早欲造件宝塔、仏事之功德、凡為鎮国利民也者、府判依請、宮察之状、早令造立、将令遂本願、故牒、

承平七年十月四日

大典惟宗朝臣(花押)

参議帥橘朝臣「公頼」

※『大宰府・太宰府天満宮古文書展図録』によるやや長文であるため、筆者が、内容によって改行し①～⑥の番号を附した。

①は六所宝塔が如何なるものかについてである。伝教大師の弘仁八年(八一七)の遺記<sup>(39)</sup>によると、六道(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人道・天道)に迷う衆生を直ちに仏道に至らしめるために、日本国で六千部の法花経を書写し、六基の宝塔を建て、一一の塔の上層に千部ずつの経を安置し、下壇では法花三昧を修せしめる。その安置建立の処は、叡山東西塔、上野・下野国、筑前竈門山、豊前宇佐宮弥勒寺である。②而してこれまでに完成したのは僅かに五ヶ所の宝塔である。就中、竈門山分塔は、沙彌證覚が未だ俗の時、承平三年(九三三)に造立成り、伝教大師の本願の如く上層に千部経を安置し、下層で法花三昧法を修している。



③未だ完成していない一処の塔は宇佐弥勒寺の分である。伝え聞く所によると、弥勒寺では二百部を書写したところで、去る寛平年中(八八九〜八九八)火災に遭い、ことごとく焼失した。

④そこで、末葉の弟子兼祐は、火災で亡くなった弥勒寺分経の替わりに管崎神宮寺において、承平五年(九三五)より写経を始め、すでに材木も運び管崎宮の辺にしている。

⑥よって速やかに、弥勒寺分塔の分を管崎神宮寺に建てるよう府の裁許を出してほしいというものである。

この文書は、⑤の「彼の宮、この宮、その地異なるといえども、権現・菩薩の垂迹猶同じ」という文言でもよく知られている。すなわち「権現」思想がはじめてわが国の文献に明確な形であらわれた文書であり、神祇はどんなに異なった土地にも自在に現れまつられるものだとする地理的感覚を随伴した、本地垂迹説の日本的展開の兆しを示す文書としても注目されているのである。<sup>37)</sup>

八幡宮の宝塔 この文書が出された承平七年(九三七)は、管崎宮創建からわずかな年代しか経っていない。管崎宮は延喜二十一年(九二二)の託宣により、筑前国穂浪郡大分宮より移座して延長元年(九二二)に建立された。移座の理由は、新羅に対する宗教的防備、大分宮を通る官道(田河路)の利用の相対的低下、外交・交易の中心地としての博多湾の重要性の増大などの理由が考えられており、またその創建には大宰府が大きく関与していた。<sup>38)</sup>この新造の八幡宮に六所宝塔を建立することの意味は、当時の状況を勘案すれば首肯できるものである。すなわち新羅の賊が度々玄界灘沿岸を脅かし、あるいは唐商の博多湾への来訪もしばしばであった当時、豊前宇佐宮弥勒寺に建

立すべく計画された宝塔を、「此の宮」管崎宮に造立しなければならぬ必要性があったのであろう。それ故「彼の宮、この宮、その地異なるといえども、権現菩薩の垂迹猶同じ」という論理は、最澄が発願した宇佐八幡宮神宮寺ではなく、管崎八幡宮神宮寺に六所宝塔の一つを建てるについての思想的正当性を標榜しているものといえよう。この件については第五項でさらに考察を加えたい。

宇佐の宝塔 『叡山大師伝』によると、最澄が亡くなる時まで六基のうち三基の宝塔は完成したことになっている。完成していないものは比叡山の二塔と西国の塔ということであるから、これに順えば、宇佐八幡宮弥勒寺の塔は最澄の生前にすでに建設成っていたことになり、宇佐弥勒寺の宝塔が成っていないとする「大宰府牒」とは齟齬することになる。最澄が、無事渡海を遂げたことを報謝するため、宇佐宮に詣でた時の様はすでに述べたとおりであり、八幡神は最も早く、最も緊密に仏教と関係を持った神とされている。最澄生前に、宝塔を建立すべく条件は調べられていたと考えられるのである。

しかしこの「大宰府牒」には「未成一処塔者、謂宇佐弥勒寺分也」と記されている。実際、弥勒寺跡の発掘調査でも未だそれらしい遺構は検出されていないという。<sup>39)</sup>ちなみに宇佐宮弥勒寺には永保元年(一〇八一)までに白河院の御願の新宝塔が建立され、万寿年間(一〇二四〜二八)に建立された石清水八幡の東宝塔院に対して西宝塔院と呼ばれた。飯沼賢司は、この両塔の建立は天台法華一乘思想に基づく六所宝塔構想を、八幡思想を中心に焼き直したものである。<sup>40)</sup>

宝塔の建立者 本文書②の部分から、承平三年(九三三)沙彌證覚によつて竈門山にも宝塔が建てられた事が知られる。沙彌證覚が如何な

る人物なのか知る手だてはないが、宝塔を建てたのは「在俗之日」というから、篤信の有力者、大宰府の富豪といわれるような人物が宝塔を建立した後、出家し沙彌證覚と名乗り宝塔での法華三昧を行ずる者になったのではあるまいか。「大宰府牒」にある千部寺の実体も不明であるが、沙彌證覚は僧兼祐の弟子筋でもあろうか。

## 五 九州の二宝塔建立の意味

二つの宝塔 『叡山大師伝』によると安南の宝塔は最澄生前に建立されていたはずである。しかし「大宰府牒」(『石清水文書』)によると、六所宝塔のうち最後まで完成していなかったのが宇佐弥勒寺分だという。両史料の矛盾は解決しようがないが、いま一度八頁の「大宰府牒」に目を向けると、何故最澄没後百年以上の時を経て、承平三年(九三三)と承平七年(九三七)という僅か四年の間に竈門山と宮崎宮という至近距離に二基の宝塔を建てるという事態に至ったのかという疑問がある。竈門山については延暦二十二年(八〇三)、はじめて最澄が来山してから四〇数年後の円仁の来山によって、大山寺発展の基礎が築かれたことと考えられる。その後の大山寺に関する史料は欠如しているが、竈門神は承和七年(八四〇)従五位上を授けられたことがはじめて史料に見え、ついで嘉祥三年(八五〇)正五位上、貞観元年(八五九)従四位下、元慶三年(八七九)従四位上、寛平八年(八九六)正四位上と着実に神階をすすめる、竈門神社が隆盛に向かったことが知られる。最澄ゆかりの地として、宝塔建立の機も熟してきたというところであらうか。

宮崎宮宝塔 延喜二十一年(九二二)観世音寺西大門において八幡神

の託宣があり、これによって延長元年(九二三)宮崎八幡宮が創建される。その託宣で、八幡神が穂浪郡大分宮から宮崎に移座したい理由の第一に、「竈門宮は我が伯母であるのに、年中節会に参来する大宰府の官人が馬に乗ったまま笠を着たままその御前を通り過ぎるが、その御恨みが甚だ恐れ有る」ということを述べている。竈門宮を八幡の伯母つまり神功皇后の姉とする言説は、中世八幡教学においてさかんに喧伝されるが、その最初の一声がここに聞かれるのである。託宣の真偽はおくとしても、『中右記』長治二年(一一〇五)十月二十九日条には、宝満山をめぐって比叡山と石清水八幡宮が争った事件の裁定をめぐる陣定で、中納言大江匡房が「昔延喜年中八幡託宣云、竈戸宮者是我姨母也」と奏聞したことが記されており、少なくとも一二世紀初頭には、「竈門宮は八幡神のオバ神で、このことは延喜年中八幡神が託宣したことだ」という説が効力を持っていたことが知られる。大宰府の祭祀と密接な関係を持つ竈門大神の威信のほどが垣間見られる。

宮崎宮の創建には竈門宮も少なからぬ関係があったわけであるが、宮崎宮創建の真の理由の第一と考えられている新羅に対する宗教的防御という面で、当時の状況が如何なるものであったか見てみると、貞観十一年(八六九)五月、博多津に新羅の賊が来襲して豊前国の年貢の絹、綿を奪うという事件があった。この事件は大宰府の海防の甘さを露呈したわけだが、その後の博多津を中心とした軍備の強化と、新羅敵視政策をおしすすめるきっかけともなった。寛平五年(八九三)五月、肥前国松浦郡に新羅の賊が襲来し、大宰大貳安部興行らが追討したが、翌六年にかけて新羅の賊はたびたび玄界灘に出没した。これに対して翌六年には、貞観十八年(八七六)に停止していた対馬への

防人の配遣を復活し、七年には新羅の凶賊にそなえて、諸国に散在する夷俘五〇人を博多警固所に加え置いた<sup>(53)</sup>。また警固所に鷲が集まる怪異があり、承平元年(九三二)これを占わせたところ、西方に兵賊がおこる兆しという結果が出る等の事件もあつた。この間海外では、九二六年、契丹が渤海を滅ぼし、九三五年には高麗が新羅を滅ぼし、翌九三六年には後百済をも滅ぼして朝鮮半島を統一した。国内では承平五年(九三五)平将門が常陸国で乱を起こし(承平の乱)、世情不安な時代であつた。このような状況下、大宰府では権帥橘公頼の奏状によつて、史生二人をやめ、檢非違使正権各一人が増置された。

このような内外共に不安な時代、ことに海外の脅威高まる時代にあつて、宮崎宮は大宰府によつて創建されたのである。その宮崎宮の神威をさらに高める装置として、最澄が鎮護国家の願をこめて発願した六所宝塔の一つが建立されたものと考えられる。最澄の時代、九州において政治的・文化的に大きな位置を占めていた「宇佐」という地の価値が、百年経つた一〇世紀には相対的に低下し、博多湾岸の重要性が増大した時代背景が、大宰府の竈門山に、さらに宮崎宮に、日々鎮護国家の祈りを行ずる宝塔の建設を実現させた要因ではなからうか。

## 六 本谷礎石群建造物復元の試み

**発掘の成果** 今回の本谷礎石群の発掘によつて、地山を削りだして成形した二五メートル四方ほどの基壇の上に、柱間二四〇+三〇〇+二四〇センチ、一辺が七八〇センチの三間四方の礎石が確認された。基壇の裾は二ないし三段の土留めのような石列があり、建物南側正面と東西の側面に石段が取り付けられている。基壇南側前面には

二〇メートル四方ほどの広場があり、その南側に谷から上がる階段も発見された。出土遺物には、瓦・土師器・須恵器・越州窯青磁碗、高さ一二センチの小金銅仏等がある。土器及び瓦の年代は、九世紀から一〇世紀のものが大半を占め、土器には一部八世紀と一一世紀後半頃のものが含まれる<sup>(54)</sup>。礎石の上に建つ建物は瓦の年代が示す時期のものと考えられ、件の『石清水文書』にある竈門山分塔が建てられた承平三年(九三三)はこの時期に含まれる。

この礎石の上にとどのような建物が建っていたかは、建築史等の専門の方々によつて検討がなされていくであろうが、敢えて私見を述べ、参考となるであろう絵画資料を提示しておきたい。

**宮崎宮社頭図** その一つは『宮崎八幡宮縁起』(宮崎宮蔵)の巻末にある境内図である。本縁起は寛文壬子年(十二年・一六七二)の奥書がある上下二巻本で、福岡県指定文化財である。絵は極彩色で精密に描かれ、末尾に「土佐住吉廣澄謹圖之(印)」の署名がある。奥書の年号は江戸期のものであるが、本殿・拜殿・楼門・回廊などとともに三重塔・護摩堂・本地堂・一切経蔵・六十六部奉納経蔵など仏教的建物が描かれた境内は室町以前の様を描いたものと考えられる<sup>(55)</sup>。本図には、現存するご神木「宮松」と「湧出石」の間に多宝塔が描かれていることが注目される。回廊の西に、東の三重の塔と対峙する形であり、本境内図のなかには、他に塔は見られない。図1は巻末の境内図を菱田青完が模写した「宮崎宮社頭図」の部分である。

多宝塔は、石の基壇の上に建てられた下層・上層ともに三間四面の塔である。下層と上層の間には漆喰の層がありその上に高欄がめぐっている。比叡山横川の根本如宝塔を思わせる形態である。また基壇の正面と右側に石段が描かれるが、おそらく左側にも石段があると考え

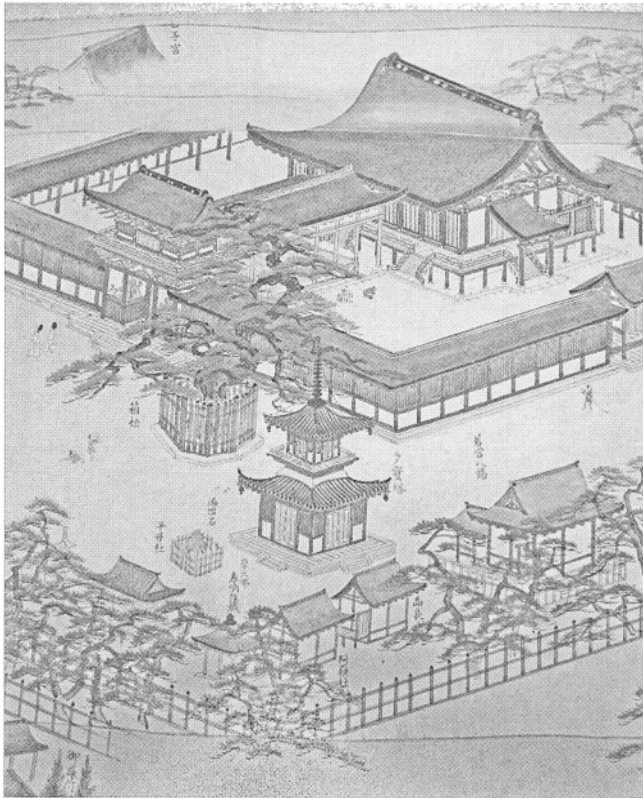


図1 宮崎宮社頭図（菱田青完模写） 宮崎宮蔵  
画面の中央に多宝塔が見える。

られる。

『石清水文書』の「大宰府牒」は、宇佐八幡神宮寺弥勒寺に建設が予定されていた多宝塔を、大宰府が宮崎宮に命じて「宮崎神宮寺」に建立させたものである。「宮崎宮」そのものではなく「神宮寺」に建てさせたということが気になる点である。

「神宮寺」とは、神祇に仕える目的から神社に附属して営まれた寺院のことであり、八世紀初頭からあらわれ、わが国神仏習合思想の発現を示す標識となった。宇佐では八幡の社と神宮寺弥勒寺は境内の別々の空間を占めているが、その宇佐宮から貞観元年（八五九）奈良大安寺僧行教によって勧請された石清水八幡宮では、同五年、勧請以

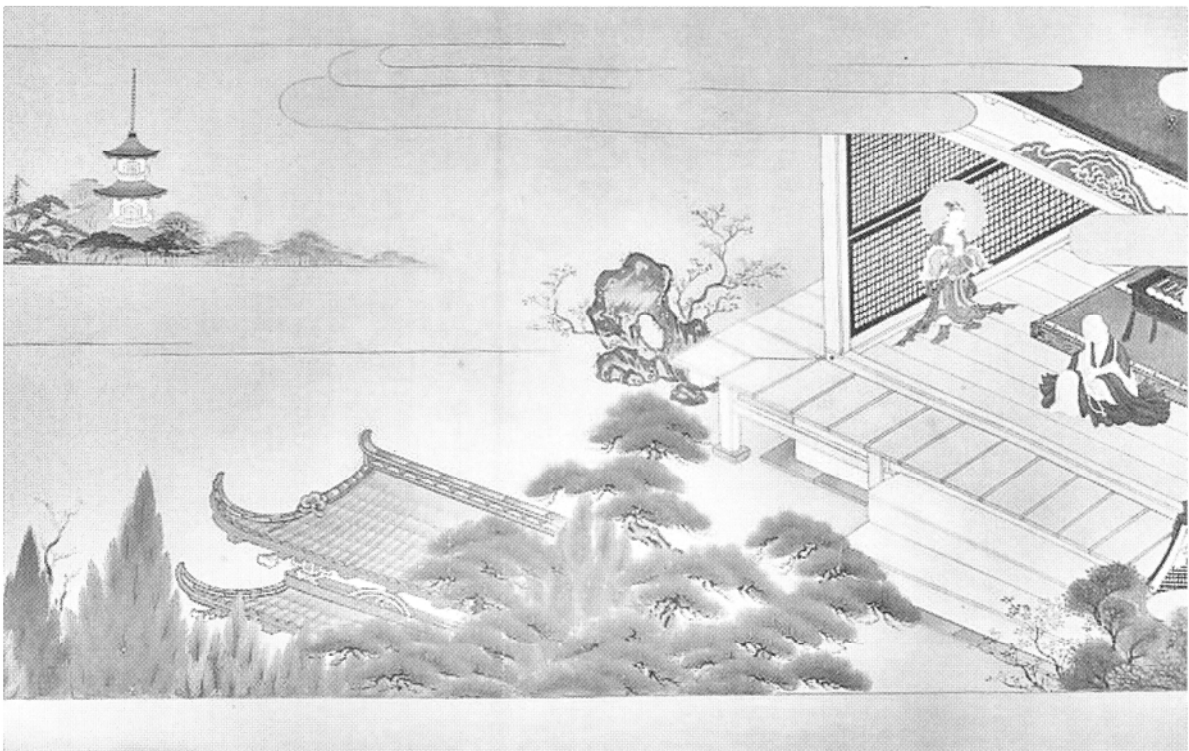


図2 岩船山地蔵菩薩縁起 高勝寺蔵  
画面左上方に多宝塔が見える。

前よりあった石清水寺を官符を申下して「護国寺」と改め神宮寺としたが、実際には八幡宮と護国寺は不二体の宮寺であり、「石清水八幡宮護国寺」とも呼ばれた。<sup>(5)</sup>石清水八幡宮と密接な関係にあった筥崎八幡宮においても同様の形態が考えられる。筥崎宮葦津明彦禰宜のご教示によれば、筥崎宮境内および周辺に神宮寺の寺地はなく、本殿をも籠めて筥崎神宮寺といったのではないかという説があるとのことである。あるいは筥崎宮と神宮寺の関係は境内の堂社は神仏渾然一体に配置され、祭祀組織が異なるというものであろうか。

現在の筥崎宮本殿は天文十七年（一五四八）に大内義隆によって再建され、天正十五年（一五八七）に遷宮式が挙行された。<sup>(6)</sup>「社頭図」の本殿・拝殿は現在の本殿・拝殿とほぼ同じに描かれている。描かれる多宝塔が、この図が描かれた時代に存在したものか、実物に忠実に描かれているのか、まして僧兼祐が建てた六所宝塔の一つであるのかなどとは、全く不明と言わざるを得ない。しかし方三間の建物が石段をもつ石の基壇の上に建っていること、それほど大きな建物ではないことなど、本谷礎石群の上に建っていた建物を想像するには、格好の情報を提供していると言えよう。

宝塔の立地 いま一つの絵画資料は『岩松山地蔵菩薩縁起』（栃木県高勝寺蔵）である。この縁起は伯耆大山の麓に住む弘誓坊明願という僧が、竈門山宝満大菩薩のお告げで、下野岩船山で生身の地藏にあり、岩船山高勝寺を開くという縁起であるが、弘誓坊が竈門山で宝満大菩薩のお告げを得る場面の絵では、弘誓坊のいる建物と雲を隔てた上方、尾根上のような所に多宝塔が描かれている。これも六所宝塔の一つだとする証拠はないが、この山の祭神が現れたのが「針の耳」辺りとする伝承を踏襲するかのよう「針の耳」らしい岩が描かれていること

など、遠隔地で描かれた全くの絵空事の図ではなさそうである。また古くは坊舎は山麓に営まれており、そこからある程度離れた地点にある多宝塔を表現したものとも考えられる。

#### おわりに

本谷礎石群周辺の雑木林を伐開した所、この地は東側正面に宝満山頂を望み、西には玄界灘を見渡すことができる絶好の立地であることが判明した。発掘調査では八世紀の祭祀土器も出土しているという。また江戸期は『筑前国続風土記附録』によると「妙見大行司の祠があり、春の峰入りに初発の行人等が補任を戴き法衣授受する所」という。宗教的儀礼が行われる場所、あるいは儀礼が行われる建物の立地は重要な要素である。最澄が法華経による護国の理想を掲げて発願した六所宝塔のうちの安西筑前宝塔院が、発願から一〇〇年を経、海外からの脅威の高まる時代に、この場所を点じて建立されたと考えるのは早計であろうか。

#### 註

- (1) 筆者が平成十年頃撮影した写真には蓮台が写っており、メモに「寶塔」のウ冠の上の点が三角形であることを記しているが、現在ではそのいずれをも確認することができない。
- (2) 小田富士雄編『宝満山の地宝』一九八二年（財）太宰府顕彰会・太宰府天満宮文化研究所
- (3) 六所造宝塔願文「天台霞標」「大日本仏教全書二二五」二六〇頁 一九一四年 佛書刊行会
- (4) 最澄の弟子一乗忠（真忠カ）が最澄没後一年半以内にまとめたものであり、

- 園田香融は史伝としてきわめて優れた伝記と評している(吉川弘文館『国史大辞典』)、『続群書類従』第八輯下・伝部十六
- (5) 景山春樹「比叡山と高野山」三九頁 一九八〇年 教育社歴史新書二九
- (6) 安東・安南・安西・安北・単于・北庭の「六都護府」が主要なもの。阿部仲麻呂が節度使として赴いた安南都護府は近年よく知られるようになった。
- (7) 景山春樹「三塔・九院・十六谷」『比叡山と天台仏教の研究』五〇頁 山岳宗教史研究叢書二 一九七五年 名著出版
- (8) 最澄の願文には「安西筑前宝塔院」については具体的な場所が記されていない。そのことについては後項で考察したい。
- (9) 景山春樹「三塔・九院・十六谷」『比叡山と天台仏教の研究』五〇～五一頁 山岳宗教史研究叢書二 一九七五年 名著出版
- (10) 『叡山大師伝』には弘仁六年(八一五)の箇所「東国行きのことが見えるが、最澄が空海の弟子泰範に宛てた弘仁七年の書状には「以来春節 東遊頭陀」とあり、『天台叢標』には弘仁八年五月最澄が緑野寺法華塔の前で円澄と広智に両部灌頂を伝授した、等の史料があり今日八年説が定着しつつある。
- (11) 『叡山大師伝』(『続群書類従』伝部十) 四六〇頁
- (12) 平成十年度天台宗仏教青年会連盟『最澄と浄法寺』一一頁 一九九八年 群馬天台青年会
- (13) 『叡山大師伝』(『続群書類従』伝部十六) 四七二頁
- (14) 平成十年度天台宗仏教青年会連盟『最澄と浄法寺』八頁 一九九八年 群馬天台青年会
- (15) 佐伯有清「円仁」三三頁 一九八九年 人物叢書 吉川弘文館
- (16) 大慈寺パンフレット並びに筆者の現地踏査による。
- (17) 日本天台宗の確立には、僧侶が旧来の戒壇で受戒し、南都の僧綱の規範に従うという状況を脱しなければならなかった。そのため最澄は大乗戒壇の設立を願い出るが生前には成らず、没後七日目の弘仁十三年(八二二)六月一日に僧綱を経ることなく天皇の勅裁によって允許された。
- (18) 『比叡山』八頁 一九七一年 比叡山延暦寺並びに筆者の実見による。
- (19) 『比叡山』一四頁 一九七一年 比叡山延暦寺
- (20) 『宇佐八幡宮弥勒寺建立縁起』に記されている。しかしその実在については

- 諸説ある。『八幡宇佐宮御託宣集』第六卷には、「天平九年(七三七)の託宣によつて翌年、日足禅院から本社の傍らに移し弥勒菩薩を本尊とする寺を建てた。即ち弥勒寺である」とあり、宇佐宮境内の弥勒寺跡の発掘調査でもこの時代に相当する、遺構・遺物が検出されている。
- (21) 『叡山大師伝』『扶桑略記』『金玉』
- (22) 最澄が香春神宮寺で神恩に報謝するため自ら法華経を講じたとき、豊前国田河郡司と村邑刀欄等が、瑞霊の状を録し最澄に奉った。最澄は固く封印し弟子義真に託し、自分の滅後に開封するように言った。最澄の滅後に開封してみると、「今月一八日紫雲が香春の峰に起り講法の庭を覆い、たちまち瑞相が見えた。また最澄渡海前、香春の山下に泊まったとき、夢に左半身は人だが右半身は石の梵僧があらわれ、自分は香春であるが、私の苦しみを救ってくれたら大師の求法を昼夜守護しよう告げた。夜が明けて香春岳を見ると、右脇が崩れて草木がなく、夕べの夢の僧のようであった。大師は法華院を建て法華経をあげたところ、山に草木が生え年々繁茂した。村の翁・婆も驚かない者はなかった。」と『叡山大師伝』に記されており、香春神と最澄のあいだの不思議な出来事に村人が驚嘆し、最澄を尊敬した様が窺える。
- (23) 竹内理三編『大宰府・太宰府天満宮史料』巻一 四四八頁による。『続々群書類従本』では最終行「観音講師」となっており、『東洋文庫本』では「観音(寺)講師」と校注者塩入良道の補注がはいっている。
- (24) 『続日本紀』天平九年(七三七) 四月朔日条に「夏四月乙巳朔、遣使於伊勢神宮。大神社。筑紫住吉。八幡二社及香椎宮。奉幣以告新羅無礼状」とあるのをはじめとして、以後度々これらの神社に同様の趣旨で祈願がなされている。
- (25) 最澄が参籠した寺は「籠門山寺」であったが、円仁の時には寺名が「大山寺」になっている。大山寺は平安末から鎌倉期にかけて多に繁栄する。
- (26) 観世音寺文書目録『平安遺文』一一一補二九九
- (27) 東大寺諸莊園文書目録(仁平三年)『平安遺文』六一二七八三
- (28) 『太宰府観世音寺年中行事目録』(観世音寺文書第一次調査分二〇)
- (29) 通行本『慈覚大師伝』続群書類従
- (30) 塩入亮忠『伝教大師』二八四頁 一九三七年 日本評論社
- (31) 『続群書類従』第八輯下 伝部十七

- (32) 『菅家後集』「山僧杖を贈る、感有りて題す」など
- (33) 高取正男『菅原道真』三八頁 一九七八年 平凡社
- (34) 所功・多賀宗隼・佐伯有清の諸氏が『慈覚大師伝』の撰者として菅原道真という結論を導き出している。小山田和夫『平安前期天台教団と慈覚大師円仁の研究』一五～二二頁 平成二年度科学研究費補助金(一般研究C) 研究成果報告書
- (35) 「六所造宝塔願文 護国縁起」では弘仁九年(八一八)となっている
- (36) 「本地垂迹」についてはじめて体系的に取り上げたのは辻善之助である。辻は「本地垂迹説の起源について」(同『日本仏教史の研究』四九頁 一九一九年 金港堂書籍)においてその概念を次のように説明している。「この説は、本地即本有の妙理無始無終の絶対的なる仏陀が、人間を利益し衆生を済度せんがために、迹を諸所に垂れて、神となつて種々の形を顕はすといふので、我邦の神祇は、其本源をたづぬればみな仏菩薩にあり、仏も神も帰する処は一つであるといふのである。この語の起りは、法華寿量品にあり、もとは久遠実成の釈迦即絶対的理想的の仏陀を本地とし、始成正覚の釈迦即現実的の歴史上の釈迦を垂迹とするのである。日本の本地垂迹説は、この説を拡張応用したのである。」
- (37) 村山修一『本地垂迹』新装版 六七頁 一九九五年 吉川弘文館
- (38) 有川宜博『八幡大菩薩宮崎宮』(式内社研究会『式内社調査報告書 第二十四巻 西海道』一八頁) 一九七八年 皇學館大學出版部
- (39) 宇佐市教育委員会江藤和幸氏ご教示
- (40) 飯沼賢司「権門としての八幡宮寺の成立―宇佐弥勒寺と石清水八幡宮の關係―」(十世紀研究会編『中世成立期の歴史像』一〇八～一二二頁) 一九九五年 東京堂出版
- (41) 大宰府の府官・郡司層・荘官等で、貿易等により富を得た者
- (42) 『続日本後紀』
- (43) 『日本文徳天皇実録』
- (44) 『日本三代実録』
- (45) 『日本三代実録』
- (46) 『日本紀略』
- (47) 『宮崎宮縁起』ほか
- (48) 「姨」は母親の姉妹。『宮崎宮縁起』では伯母つまり母親神功皇后の姉といひ、『八幡愚童訓』では妹となっているが、神の言葉としては「オバ」といったのであり、「姨」が元来の表記と考えられる
- (49) 『日本三代実録』巻第一六 清和天皇
- (50) 『太宰府市史 古代資料編』六二〇頁 二〇〇三年 太宰府市
- (51) 『日本紀略』前編二〇 亭子院
- (52) 『類從三代格』卷十八
- (53) 『日本紀略』後編一 朱雀天皇
- (54) 『別聚符宣抄』太政官符大宰府
- (55) 太宰府市教育委員会「宝満三四次現地説明会資料」
- (56) 「天保年中之図/慶応三年丁卯正月吉日/箱崎大宮司從五位下/田村備後守波多重純書」の署名のある境内図には本地堂・護摩堂・鐘樓はあるが、塔など仏教的建物の大半は失われている。
- (57) 中野幡能「石清水八幡宮」『国史大辞典』吉川弘文館
- (58) 『宮崎八幡宮御遷宮記録』宮崎宮宮大工日高家文書
- (もり・ひろこ 太宰府市公文書館構想調査研究委員会委員/福岡県文化財保護審議会専門委員(無形・民俗文化財部会長))